



「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3/TEL 045-774-9861洋光台  
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / ●世話人代表 金子 敬  
●事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 巻頭言

**武藤小枝里**

むとう さえり

人材育成・教育開発専門家

佐々木さん一家と出会ったのは、私の2度目のルワンダ赴任の2007年2月でした。当時、ルワンダは復興から開発へと大きく飛躍しようとしている時期で、11年ぶりに戻った私にとり同じ国に来たとは思えない変貌ぶりでした。また私の仕事も、帰還難民の教育支援から、国家教育政策づくりへと、時間の変遷を感じました。

最初の赴任であった1996年当時、紛争の傷跡が癒えないルワンダで暮らし、笑顔の下にしまい込んだ深い悲しみ、こらえ切れず溢れだす怒り、乾き切らないかさぶたの下に隠された人々の痛みに触れる機会もありました。「こんなに痛手を負った国で復興なんて可能なのか?」、当時、まだ20代であった私はそんな疑問を抱えたまま、その1年後に離任し、他の国で仕事していくうちに、ルワンダはいつしか遠い思い出となっていました。また実際にその後の十数年、人々は世界で次々と起こる非劇を目の当たりにし、多くの人にとりルワンダは忘れられる国となりつつありました。

しかし、佐々木さんは、ルワンダがこうした沈痛な復興の道のりを歩む中、ル

ワンダの人々に関わる事を決意した人です。ルワンダの「紛争の歴史」を通じて、傷ついた人が背負った重荷は、とうてい自分一人では抱えられない程大きく、また傷つけた人が背負った重荷は、その人の一生をかけても償えないものです。現地で暮らせば、「癒しと和解」という、人の心に向き合う支援が、いかに忍耐と時間を要する、困難で、途方もない活動か実感します。今日食べる事に必死な人々があふれる中で、「『人間(ひと)らしく生きる』なんて悠長な事言ってもらえないよ」と、ややもすると佐々木さんとその仲間が伝えようとする福音は、単なる理想主義と誤解を受ける事もあるでしょう。

しかし、どんなに資金を投入し復興事業によって壊れた街並みや道路がきれいになっても取り戻せないものがあります。「心の平和」。厄介なのは、これを回復するために、決まった処方箋や特効薬はなく、ただひたすら、重荷を背負った一人一人の、その重荷をほどこおろし、その荷物の整理を手伝っていくしかないのです。

2007年、再赴任した私が、様変わりし

たルワンダで、その未来を確信できたのは、ちりひとつない美しいビルの街並みや新車であふれる新しい道路という事実ではなく、佐々木さんと共に働き、またこの活動に参加する現地の人たちが、終わりの見えない本当に気の遠くなるような、しかし、「これしかない（これ以外に方策はない）事」を続けている事でした。それは「紛争の歴史」の中に、淡々と、しかし新しい「和解の物語」が綴られているという事です。表面的に様変わりしていく中で、取り残され、手つかずあるいは忘れさられている「（心の傷の）癒し」に向き合う佐々木さん、昨年11月の帰国報告を聞き改めて、「この人は、針の穴を通る覚悟をした人なのだ」と感じました。

実は、今年の震災で私の故郷南相馬市

は地震、津波、そして放射能の3重災害に見舞われ、親類縁者の多くが巻き添えとなり、今なお不自由な生活を続けています。彼らの不安な避難生活、家を失い、住む場所を離れる最中で、絆の強さと同時にその危うさも目の当たりにし、改めて、「人と人がつながる事」の意味を噛みしめています。ルワンダと被災地を比較する事は簡単にはできないと思いますが、今回、佐々木さんが支援教会のご縁を通じて、偶然にも私の故郷の惨状を視察して下さった事は、これからも佐々木さんと恵さんという編み棒が、ルワンダの人々と日本のみなさんの心の糸で「和解の物語」を編み続けていく中で、新しい絵柄となっていくかもしれないなど期待しております。

了

## 佐々木和之 ささきかずゆき

### 「平和構築」専攻コース、スタート！

「真の平和にはほど遠い。でも、ぼくはピースメーカーになりたい！」そんな熱い思いをもった若者たちと、一緒に歩んで行くことは、何よりの幸せです。

今日は、3月11日。東日本大震災と福島原発事故の被災者の方々を覚えつつ、1日を過ごしました。震災1周年ということで、あの日の記憶が鮮明に蘇り、深い悲しみと無念さに打ちひしがれる方々がたくさんおられることでしょう。ここキガリでも、3日後の水曜日、在ルワンダ日本大使館で記念式典が開かれます。参加して下さるルワンダの方々、そして、在ルワンダ日本人と共に被災地に思いを寄せ、お祈りをしたいと思います。

#### ■「償いのプロジェクト」を新たな地で

前号で、リーチが新しい地域での「償いのプロジェクト」開始に向けて動き出したことをお伝えしました。まず、今年の11月末から12月初めにかけての3日間、ブゲセラ郡ンハラマ地区で（首都キガリ



●過去去の経験を打ち明け合う元受刑者たち（ンハラマ地区での癒しのセミナー「エンパワー」の一角）

の南方約30キロ）、虐殺加害者として公益労働刑を終えた元受刑者50名を対象に、第1回目の学習会を実施しました。ンハラマ地区は、虐殺の舞台となった教会が記念施設として残されていることでも知

られている所です。その後、1月24日から週末を挟んで2月1日までの7日間、同じ加害者の方々を対象に、「エンパワー」と呼ばれる、心に傷を負った人々の癒しを目的とするワークショップを実施しました。今から2週間後の3月27日からの2日間は、第2回目の学習会を実施する予定です。元受刑者の方々が、学習会でチャレンジを受け、ブゲセラ郡においても具体的な「償いのプロジェクト」に繋がるようにお祈りください。

「償いのプロジェクト」を立ち上げるためには、加害者側への働きかけだけではなく、被害者側への働きかけも大変重要です。リーチはこのブゲセラ郡で、まず、2007年から2009年にかけて、ジェノサイドの被害者である女性たちと、加害者を家族に持つ女性たちを対象に癒しと和解のセミナーを実施しました。そして2010年、セミナー卒業生からなる女性の協働グループが誕生し、現在は、「トゥリ・ウムエ」（私たちはひとつ）という、石鹸づくりの協同組合として活動を続けています。リーチの活動を通し、お互いの関係を修復した女性たちですが、彼女たちの癒しの旅は続いています。

女性たちの心がさらに癒され、お互いの絆をさらに強めていくことができるように、先日、ブゲセラ郡のニヤマタ地区で「エンパワー」を実施しました。ブゲセラ郡で「エンパワー」が実施されるのは3回目ですが、今回は、元受刑者の方々との関係作りを進めているンハラマ地区からも、リーチの活動に触れるのは初めてという女性たちが参加しました。その時の様子については、今回の「エンパワー」をつぶさに観察された菊地信子さんのレポートを掲載させていただきますのでそちらをご覧ください。菊地さんは昨年末、私の母校の一つ、ブラッドフォード大学大学院で平和学修士課程を修了し、2月中旬から約1カ月間、リーチで研修を受けておられます。

## ■「平和構築」専攻コースが間もなくスタート！

私はこれまで、プロテスタント人文社会科学大学（Protestant Institute of Arts and Social Sciences/PIASS, 以下ピアス）開発学部の教員として、ルワンダ初の平和・紛争研究学科を創設のために働いてきましたが、この新学科の最初のプログラムとなる「平和構築と開発」専攻コースが今月末によいよ始まりませう。この新コース最初の専門授業科目は「グローバル政治論」。ジュネーブ大学外交スクールでも教えておられるジラルディン学長が直々に授業を担当されます。



## ●急ピッチで建設が進むピアスの新教育棟●

2月16日、平和構築の分野で活動するルワンダの政府機関、NGO、宗教界の代表者約20名をピアスに招いてワークショップを開催し、新学科への期待や要望とともに、カリキュラムの改善点等についても貴重な意見を聞くことができました。また、皆さまからの支援金を用いさせていただき、学生たちが利用する図書の拡充にも努めてきましたが、少なくとも今後半年間のコース運営に必要な関連図書約200冊がほぼ揃いました。これらの図書のルワンダへの運搬や送付には、日本、アメリカ、イギリスに在住の多くの友人・知人のご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

今週、開発学部の現時点での最上級生である3年生82名が、「平和構築と開発」か「農村・コミュニティ開発」のいずれかを、自分の専攻コースとして選

扱します。何人の学生たちが「平和構築と開発」の方に来てくれるのか、少しドキドキしながら待っているのですが、最終的には10名前後になるのでは、と見ています。

昨年「平和・紛争研究概論」の授業を担当したので分かるのですが、ピアスの学生たちの平和や紛争への関心が決して低いわけではありません。それではなぜ履修者が少なくなるのかと言うと、主に二つの理由があるように思います。その一つは、「卒業後の就職市場」が小さいことです。平和構築や紛争解決は、ルワンダの将来のためにとっても重要な専門分野ですが、一般的にはまだよく知られていません。しかも、それほどつぶしの効く専門分野でもありません。ですから、学生たちへのアピールと共に、平和構築コースを社会に認知してもらうための取り組みが不可欠です。今後も先月開いたようなワークショップや公開講座等の取り組みを続けていく予定です。

二つ目は、私が過去1年間、学生が提出するレポートの「コピー問題」（他人

の文章やアイディアを自分のものであるかのように、適切な引用法を用いずに流用する問題）に厳しく対処したことなどから、私に関与する履修科目の多いコースに進めば「大変そうだ、落第もあり得る」と思っている学生が多いことがあるようです。ルワンダでは、「コピーして何が悪い？」と思っている学生たちも多く、忍耐強い指導が必要なのです。

今日現在、平和構築コース専攻の意思を固めている学生は6名。そのうちの1人のセルジ君に専攻理由を尋ねたところ、「ルワンダにはまだ本当の平和とはほど遠い現実がある。僕はピース・メーカーになりたい」と熱く答えてくれました。彼のような学生に教師として関わられて幸せです。少なくとも最初の数年は少数精鋭のコース運営になるでしょうが、それはこちらの望むところ、教育内容の充実を力と注ぐとともに、将来この国のピース・メーカーになる若者たちとしっかり信頼関係を築いていきたいと思えます。

3月11日記

## ワークショップ「エンパワー」報告

菊地 信子

きくち のぶこ

トラウマに対して無力に思える人々が、苦しみに目を背けず  
憎しみを乗り越える力を、得ることができますように。

1994年のルワンダ大虐殺から18年を経た今、虐殺生存者の人々が自分の内にある恐怖、悲しみや苦しみと立ち向かおうとしている。2月21～29日の7日間(土・日を除く)、リーチが主催する「エンパワー」と呼ばれる癒しのワークショップが、ブゲセラ郡ニヤマタ地区で行われた。52名の参加者はすべて、大虐殺により心身に深い傷を受けた女性たちであった。

「エンパワー」は、深刻なストレスやトラウマに悩まされている人がそれらを乗り越え、より良い生活を送るためのすべを身につけることを目的とする研修会

である。2部構成からなる「エンパワー」の前半部は、参加者が今後、ストレスやトラウマの引き金となる場面に直面したときに自分の感情をコントロールす



●女性たちによる分かち合い●

る力を養うためのトレーニング、後半部は、‘赦し’という内的アプローチにより真の癒しに至る学びと実践である。

今回私が参加した「エンパワー」の第1日目は、聖書朗読・説教・賛美に始まり、その後、メンバー間の信頼醸成を目的としたグループワーク（14名のグループ×3）が行われた。1週間のプログラムを通し、グループワークでは、以前の受講者たちの中から選ばれた6人が、ファシリテーター役を務めていた。今回の研修会は、将来、彼女たち自身で「エンパワー」が実施できるように、実地訓練の場にもなっていた。第2日目から4日目は、自分が抱えるストレスやトラウマ症状を把握し、その原因となった経験を突き止め整理するという作業と、深呼吸やストレッチ、ネガティブ思考からポジティブ思考への変換のトレーニング等が行われた。

トラウマからの解放を求めて歩みだそうとする参加者に対し、今回の研修会は、安全が確保された環境のもとで、自分の痛みの原因に向き合う機会を提供していた。まず参加者が1対1で、ファシリテーターに過去の経験を打ち明ける機会が設けられ、その後には、3人のグループになって、同じような悩みをもつ他の参加者の告白に耳を傾け、自分もその人たちの前で告白するという時間が持たれた。そのような中で、多くの参加者が勇気をもって、苦しみで一杯になった心身を少しずつ外に向けて開け放ち始めた。ある女性は、「今までずっと口を閉ざしていた。でも昨日から話し始めた。まるで、一杯になったタンクから水が出て行くような気持ちだった。」と語った。その他の証からも、彼女たちが苦しみを吐き出すことにより、心にゆとりの空間が生まれたことが伝わってきた。

第5日目から7日目は、他者に対して抱いてきた憎悪感情からの解放を目的として‘赦し’についての学びがあった。私たちは、自分では受け止めきれない経

験をしたとき、相手を責めることでその重荷を下ろそうとすることがある。キリストの福音にもとづいて構成されている「エンパワー」は、そのような憎しみに囚われた自分自身の悲惨に目を向けさせる。そして、その重荷を自分に代わって背負うためにイエス様が来てくださったという救いのメッセージが分かち合われる。



●「エンパワー」の一コマ(憎しみを持ち続けるとは、大きな石を持ち続けるのと同じ様に大変なこと)●

参加者の1人は、最終日の分かち合いのときに「今までは、加害者に近づくことができなかった。そして自分が赦さなくても何も問題はないと思っていた。しかし、この研修会を通して神様に赦された自分の姿を知った。自分も赦されたのだから、今度は自分も赦したい」と告白した。そこには、自分が背負う重荷の大きさ、それに対する自分の弱さや罪を自覚し、それら全てが赦されたという恵みを受けとめ、今度は赦す者として真の再生の道を歩み始めている姿があった。

トラウマに対して無力だった参加者が、苦しみから目を背けるのではなく、すべてをイエス様にゆだねることで苦しみと憎しみを乗り越える力を得る。この希望のメッセージを研修会は伝えていた。7日間は、1人の人が真の赦しに至るには短すぎる期間だと思う。しかし、最終日の参加者の証から、この赦しによる希望が真実として彼女たちの心に届いたことを知らされた。受講を終え、参加者は自分の生活に戻り、赦すと告白した相手に前にするようになる。彼女たちはこの時

に本当の試練や葛藤を経験することになるのだろう。今和解の道を歩みだした彼女たちの前には、ルワンダの千の丘の様な山あり谷ありの旅路が広がっているのかもしれない。しかし、ここで彼女たち

のうちに芽生えた赦しの決意は、これから彼女たちの一生を左右する力の源となって、ルワンダの地で動き出すことだろう。

了

## 佐々木 恵

ささき めぐみ

## 嬉しい祝いの日！

加害者も、被害者も、一人一人が、この日、人間としての威厳を携えて、共に集い、共に祝ったのです。

1月2日、東部州キレヘ郡。快晴の空の下、コンシアーナさん宅の庭で、彼女の家を含め、昨年末に完成した4軒の新築祝いが行われました。元受刑者の方々がボランティアで建てた家の新築祝いです。地元の方々はもちろんのこと、日本からはミッション・スタディーツアーの方々11人、また、アメリカからはマサチューセッツ州の教会関係者5名とその地域の大学生8人も参加しての、とても大きなお祝いでした。

予定どおり10時前に会場に着いた私たち日本人は、リーチの活動参加者の製作したクラフトの店でお土産を物色ながら会の始まりを待ちました。

遅れて来られた政府機関「統合と和解委員会」の代表者やキレヘ郡の首長を中央にお迎えして新築祝いが始まったのは11時。コンシアーナさんの感謝の言葉や、彼女の家を建てた元受刑者の方々の証し、そして、これまでにこの活動で家を建て



てもらった受益者の方々の証し、そしてゲストの方々からのメッセージを中心に、クワイヤーの賛美を挟みながらのお祝いは、お昼も食わずに延々と3時まで続きました。長時間の集まりでしたが、それにもかかわらず、2012年が始まったばかりの日に、このようにたくさんの方々が喜び集う集会に参加できたことを私は心から嬉しく思い、5時間という時間が、あっという間に過ぎた気がしました。

私たち家族がルワンダに来てから6年間、私はリーチが取り組む「家造り」の進展を和之と共に祈りつつ、またそこで働く和之の仕事ぶりをずっと傍らで見してきました。この活動は地道な活動でした。小さな活動でした。神様のみこころにかなう仕事だと信じていましたが、リーチで働くただ1人の外国人として、いろいろな困難に直面したこともありました。しかしこの日、この活動の中心におられるジェノサイドの被害者の方々、元受刑者の方々が、始めてお会いした頃とまったく違う表情で、本当にそれぞれが人間としての威厳を備えたお一人お一人としてこのお祝いに参加し、それぞれの証をされていた、そのことを改めて眼にすることができたのでした。そしてこの活動が、300人以上もの人がともに集い、歌い、証し、祈りあう、大きな喜びの出来事だったのだということをも、この日目の当

たりにしたのでした。これまでの和之の、リーチの、活動に参加した元受刑者の、受益者の、そして、日本の支援者お一人お一人の、祈りと献金と働きとが一つになって、このような喜びの出来事として祝われているということを実感したのでした。

このルワンダのキレヘという片田舎に、



小さいかもしれませんが、確かな光が、このように大勢の人々によって掲げられています。その光は、神様ご自身が働きかけ、灯してくださった光です。その光がこれからもこのルワンダで輝き続けますように、この活動に繋がる方々と共に掲げ続けていきたいと思えます。私たちをミッションボランティアとして送り出してくださった日本バプテスト連盟、そして、私たちの生活を支えてくださっている、そして、この「家造り」の資金を提供してくださった「支援会」の方々に、改めて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願い致します。

了

## 「佐々木さんを支援する会」事務局から

### 帰国報告集会2011

昨年の11月26日。ルワンダから帰国された佐々木和之さんを迎えて「佐々木さんを支援する会・報告集会」が、日本バプテスト連盟目白ヶ丘教会で開催されました。

佐々木さんは、第一期、第二期を通して取り組んでこられたREACHのセミナーや「償いの家づくりプロジェクト」によって、虐殺加害者と被害者との関係が変えられていく実例を報告してくださいました。「償いの家づくり」は、かつては加害者たちの受刑作業の一貫として取り組まれてきましたが、今では、その刑期を終えた元受刑者たちが、なおもボランティアとして自ら進んで家づくりに携わっています。自らの犯した罪に対する真摯で継続的な償いの気持ちが加害者たちに起こされているのです。被害を受けた女性たちもまた、加害者たちに対する恐怖や憎しみを抱いたままでありながらも、それら加害者たちに自分の家を建てても

## 「佐々木さんを支援する会」事務局長 吉高 叶

らうことを通して、「自己の尊厳の回復」を望んでいるのだそうです。そのように、双方が勇気を出し合うことで、家を作る人々も、それを受け取る人々も、まさしく、家が建ち上がるように、もう一度人間としての尊厳と希望とが立ち上がっているのです。佐々木さんの報告を通して、「癒しと和解」とは「相互関係によるプロセス」なのだということを教えられました。

虐殺から17年を経て、ようやく告白できる罪責。それを通して被害者の心と身体に少しずつ癒しが染み通っていく。

「赦し」や「和解」とは、そうした長い時を必要とするものであり、だからこそ、忍耐強い継続的なコミットメントを必要とする業なのです。継続的で息の長いコミットメント。これが佐々木さんのルワンダへの関わりの基本姿勢です。佐々木さんはいま「癒しと和解のプロセス」に、期待と実感をもって携わっていくこ

れからの若者たちへの教育に関与したい」と、プロテスタント人文社会科学大学の平和・紛争研究学科の創設に尽力しておられます。ルワンダでの三期目(2011年度～)は、これまでの活動と共に、「人づくり」プロジェクトが大きく加わっていきます。大学の学科の創設と言っても、何も無いところに、自らがまず場になり、学ぶための環境づくりをし、若者たちへ学ぶことを呼びかけていく、そんな一からの創造なのだそうです。持ち出しばかりです。でも、そうしてでも、歴史や課題を学生たちと共有し、「未来の創り方」を考え合いながら生きていきたと言う佐々木さんの熱いビジョンを聞いていると、「ああ、その学びの運動に、自分も連ならせたい」と思われるのです。報告集会に参加していた方々も、みんな、そんな思いへと導かれたことでしょう。

報告集会・二部では、「支援する喜び」と題して交流集会がもたれました。まず、2007年に佐々木さんを学校に迎えて以来、ずっと「ルワンダの和解」のために支援を続けてくださっている関東学院小学校の石塚武志教頭先生が、昨年11月に佐々木さんを迎えて行われた講演授業の際の子どもたちの感想文を披露してくださいました。子どもたちは、彼ら彼女らなりに「和解」の難しさを理解しようとし、自分たちの日常の「関係」に置き換えたり、なぞらえたりしながら、人と人とが和解して生きることの大切さを文章にしておられました。何より、石塚先生ご自身の、佐々木さんへの支援の情熱に、とても心を撃たれました。

次に、横浜JOYバプテスト教会のメンバー・菊地康子さんから、支援する喜びが

語られました。菊地さんは、ご自身の教会で、支援を継続するために工夫し、運動を続けてくださっています。そんな彼女がおっしゃいました。「教会のみなさんの佐々木さんの活動への想いは、いつも新鮮です。それはとりも直さず、ルワンダから届く報告が、驚きと感動に満ちているからにはほかなりません」と。嬉しい報告でした。

更に、「撫順の奇跡を受け継ぐ会」の荒川美智代さんから挨拶がありました。佐々木さんとの出会いの衝撃。そして「撫順の奇跡」と呼ばれる出来事(本誌前号の巻頭言に掲載されています)とも通じ合うテーマを見いだして感激なされたこと。まさに、過去において、そして現在進行形の出来事において、「人間の関係性」に光をあてている「奇跡の物語」は厳然として輝いていて、その光を、私たちが見落とさないようにして生きることの大切さを、共に感じさせられた挨拶でした。

集まってくださった方々と共に、短い時間ではありましたが、質疑応答や感想を届け合う時間を過ごし、心に残る素敵な報告集会を終えました。



●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会

●ホームページを是非ご覧下さい。 <http://rwanda-wakai.net/>

●世話人会 金子 敬(古賀教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、  
村上千代(日本バプテスト女性連合幹事)、吉高 叶(栗ヶ沢教会牧師)